
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ
(例) 蛇《へび》

月 日。

郵便受箱に、生きている蛇《へび》を投げ入れていった人がある。憤怒。日に二十度、わが家の郵便受箱を覗《のぞ》き込む売れない作家を、嘲《あざけ》っている人の為《な》せる仕業にちがいない。気色あしくなり、終日、臥床。

月 日。

苦悩を売物にするな、と知人よりの書簡あり。

月 日。

工合いわるし。血痰しきり。ふるさとへ告げやれども、信じて呉《く》れない様子である。
庭の隅、桃の花が咲いた。

月 日。

百五十万の遺産があったという。いまは、いくらあるか、かいもなく、知れず。八年前、除籍された。実兄の情に依《よ》り、きょうまで生きて来た。これから、どうする？ 自分で生活費を稼ごうなど、ゆめにも思ったことなし。このままなら、死ぬるよりほかに路がない。この日、濁ったことをしたので、ざまを見ろ、文章のきたなさ下手《へた》くそ。

檀一雄氏来訪。檀氏より四十円を借りる。

月 日。

短篇集「晩年」の校正。この短篇集でお仕舞いになるのではないかしらと、ふと思う。それにきまっている。

月 日。

この一年間、私に就《つ》いての悪口を言わなかった人は、三人？ もっと少ない？ まさか？

月 日。

姉の手紙。

「只今、金二十円送りましたから受け取って下さい。何時《いつ》も御金のさいそくで私もほんとに困って居ります。母にも言うにゆわれないし、私の所からばかりなのですから、ほんとうにこまって居ります。母も金の方は自由でないのです。(中略。)御金は粗末にせずにしんぼうして使わないといけません。今では少しでも雑誌社の方から、もらって居るでしょう。あまり、人をあてにせずに一所けんめいしんぼうしなさい。何でも気をつけてやりなさい。からだに気をつけて、友だちにあまり付き合ない様にしたほうが良いでしょう。皆に少しでも安心させる様にしなさい。(後略。)」

月 日。

終日、うつら、うつら。不眠が、はじめた。二夜。今宵、ねむらなければ、三夜。

月 日。

あかつき、医師のもとへ行く細道。きっと田中氏の歌を思い出す。このみちを泣きつつわれの行きしこと、わが忘れなば誰か知るらむ。医師に強要して、モルヒネを用う。

ひるさがり眼がさめて、青葉のひかり、心もとなく、かなしかった。丈夫になろうと思いました。

月 日。

恥かしくて恥かしくてたまらぬことの、そのまんまんなかを、家人は、むぞうさに、言い刺した。飛びあがった。下駄はいて線路！ 一瞬間、仁王立ち。七輪《しちりん》蹴《け》った。バケツ蹴飛ばした。四畳半に来て

、鉄びん障子《しょうじ》に。障子のガラスが音たてた。ちゃぶ台蹴った。壁に醤油。茶わんと皿。私の身がわりになったのだ。これだけ、こわさなければ、私は生きて居れなかった。後悔なし。

月 日。
五尺七寸の毛むくじゃら。含羞《がんしゅう》のために死す。そんな文句を思い浮べ、ひとりでくすくす笑った。

月 日。
山岸外史氏来訪。四面そ歌だね、と私が言うと、いや、二面そ歌くらいだ、と訂正した。美しく笑っていた。

月 日。
語らざれば、うれい無きに似たり、とか。ぜひとも、聞いてもらいたいことがあります。いや、もういいのです。ただ、 ゆうべ、一円五十銭のことで、三時間も家人と言い争いいたしました。残念でなりません。

月 日。
夜、ひとりで便所へ行けない。うしろに、あたまの小さい、白ゆかたを着た細長い十五六の男の児が立っている。いまの私にとって、うしろを振りむくことは、命がけだ。たしかに、あたまの小さい男がいる。山岸外史氏の言うには、それは、私の五、六代まえの人が、語るにしのびざる残忍を行うたからだ、と。そうかも知れない。

月 日。
小説かきあげた。こんなにうれしいものだったかしら。読みかえしてみたら、いいものだ。二三人の友人へ通知。これで、借金をみんなかえせる。小説の題、「白猿狂乱。」

底本：「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年6月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

初出：「文芸」

1936（昭和11）年6月1日発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年3月17日作成

2006年7月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。